2. 3　生態系の人為的な攪乱状況 (外来種の分布状況)

底生動物の場合は、食用として持ち込まれたスクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）やウシガエルの餌として持ち込まれたアメリカザリガニなどのように意図的に持ち込まれたものや、他の輸入水産物に混入して入ってきたものなど、本来は日本に生息しない国外の生物種が侵入し、自然界へも広がっている例が数多くみられます。

このような人の活動に伴う生物の本来の分布域外への移動により、生態的に優勢な外来種によって在来の生物種が減少したり、地域で保有されていた固有な遺伝子の自然には起こらない交雑による喪失をもたらしたりすることで、生態系へ様々な影響を与えることが懸念されています。ここでは、人為的な生態系の攪乱を明らかにするために、外来種ハンドブック（日本生態学会編,2002)で侵略的外来種ワースト 100 に指定されている底生動物や、環境省の外来生物法で特定外来生物および要注意外来生物に指定されている底生動物の確認状況について整理しました。

【外来種の確認状況（スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)）】　　(底生動物・魚介類調査)

- **スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)を 9 河川で確認**

スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ) は南アメリカ原産の巻貝で、1981 年頃に食用として養殖するために台湾から輸入された種です。この種はイネ等の農作物に被害を与えることが知られています。主に水田や水路に多く分布しますが、河川が分布拡大の経路になっている可能性が考えられることから、河川での確認状況を整理しました。

スクミリンゴガイは今回とりまとめを行った 70 河川のうち､17 河川で確認されました。前々回、前回も調査を行っている 54 河川での確認状況からみると、増加傾向にあることがうかがえました。

(資料掲載: 2-41、2-50 ページ)

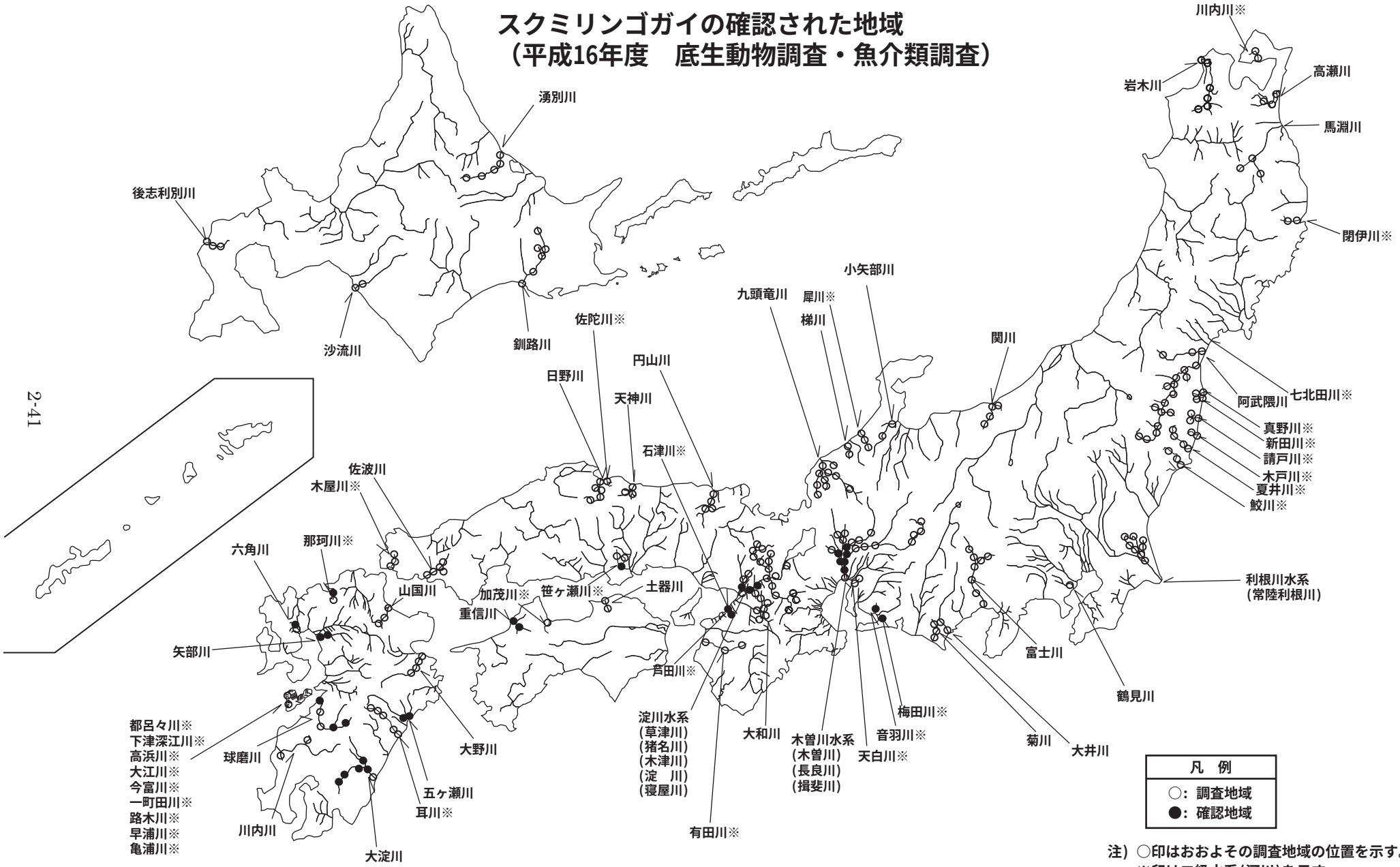
確認河川数の比較 (対象河川: 54 河川)

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)	9 河川	13 河川	15 河川

スクミリンゴガイは、生態系や在来種に大きな影響があるとして、外来種ハンドブック（日本生態学会編, 2002)で侵略的外来種ワースト 100 に指定されています。また、環境省の外来生物法の要注意外来生物にもなっています。

スクミリンゴガイは、北海道地方、東北地方、関東地方、北陸地方の河川では、前々回調査、前回調査、今回調査ともに確認されませんでした。一方、中国地方の笹ヶ瀬川では今回調査で新たに確認されました。

スクミリンゴガイの確認された地域
（平成16年度　底生動物調査・魚介類調査）



注）○印はおおよその調査地域の位置を示す。
※印は二級水系(河川)を示す。

【外来種の確認状況（カワヒバリガイとコウロエンカワヒバリガイ）】(底生動物・魚介類調査)

- **カワヒバリガイを 4 河川、コウロエンカワヒバリガイを 9 河川で確認**

国外産の貝類として中国原産のカワヒバリガイとオーストラリア原産のコウロエンカワヒバリガイの確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った 70 河川では、カワヒバリガイは中部地方の木曽川水系木曽川、長良川、揖斐川、近畿地方の淀川水系淀川の 4 河川で確認されました。コウロエンカワヒバリガイは、関東地方、中部地方、近畿地方、九州地方の 9 河川で確認されました。前々回、前回も調査を行っている 54 河川での確認状況を比較すると、カワヒバリガイは 3 回とも同じ河川で確認されました。コウロエンカワヒバリガイは、今回九州の 2 河川で新たに確認され、確認河川数は増加傾向にありました。

(資料掲載: 2-39～40、2-50 ページ)

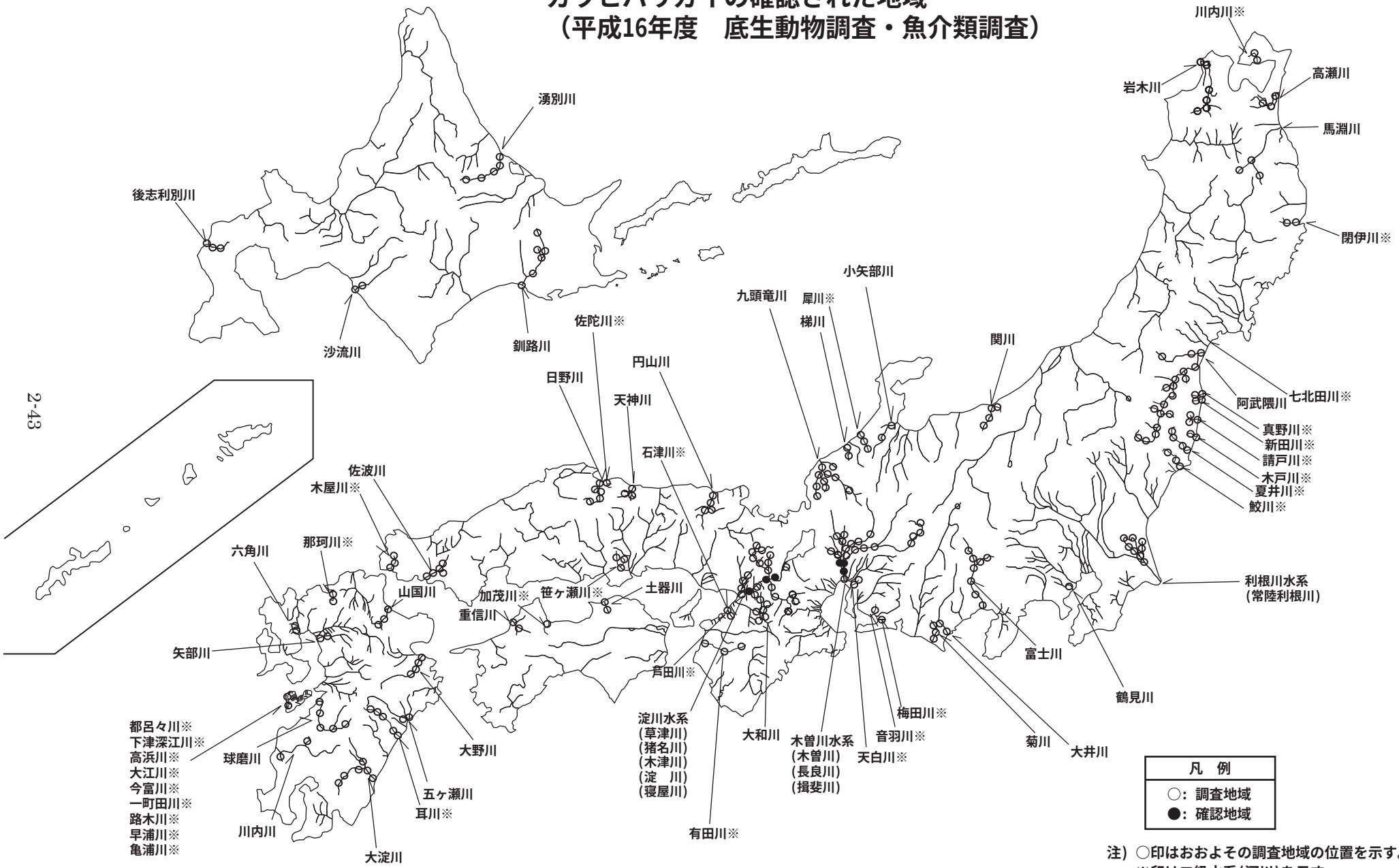
確認河川数の比較　(対象河川: 54 河川)

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
カワヒバリガイ	4 河川	4 河川	4 河川
コウロエンカワヒバリガイ	5 河川	7 河川	9 河川

中国原産のカワヒバリガイとオーストラリア原産のコウロエンカワヒバリガイは、取水管や排水管の内壁に付着して、水の疎通を悪くする被害を出すのみでなく、大量斃死を起こし、水質の悪化を引き起こすことが知られています。カワヒバリガイは淡水域、コウロエンカワヒバリガイは汽水域に生息しますが、ともに河口域や河川域での分布拡大が懸念されている種で、生態系や在来種に大きな影響があるとして、外来種ハンドブック（日本生態学会編,2002)で侵略的外来種ワースト 100 に指定されています。また、コウロエンカワヒバリガイは、環境省の外来生物法の要注意外来生物、カワヒバリガイは特定外来生物となっています。

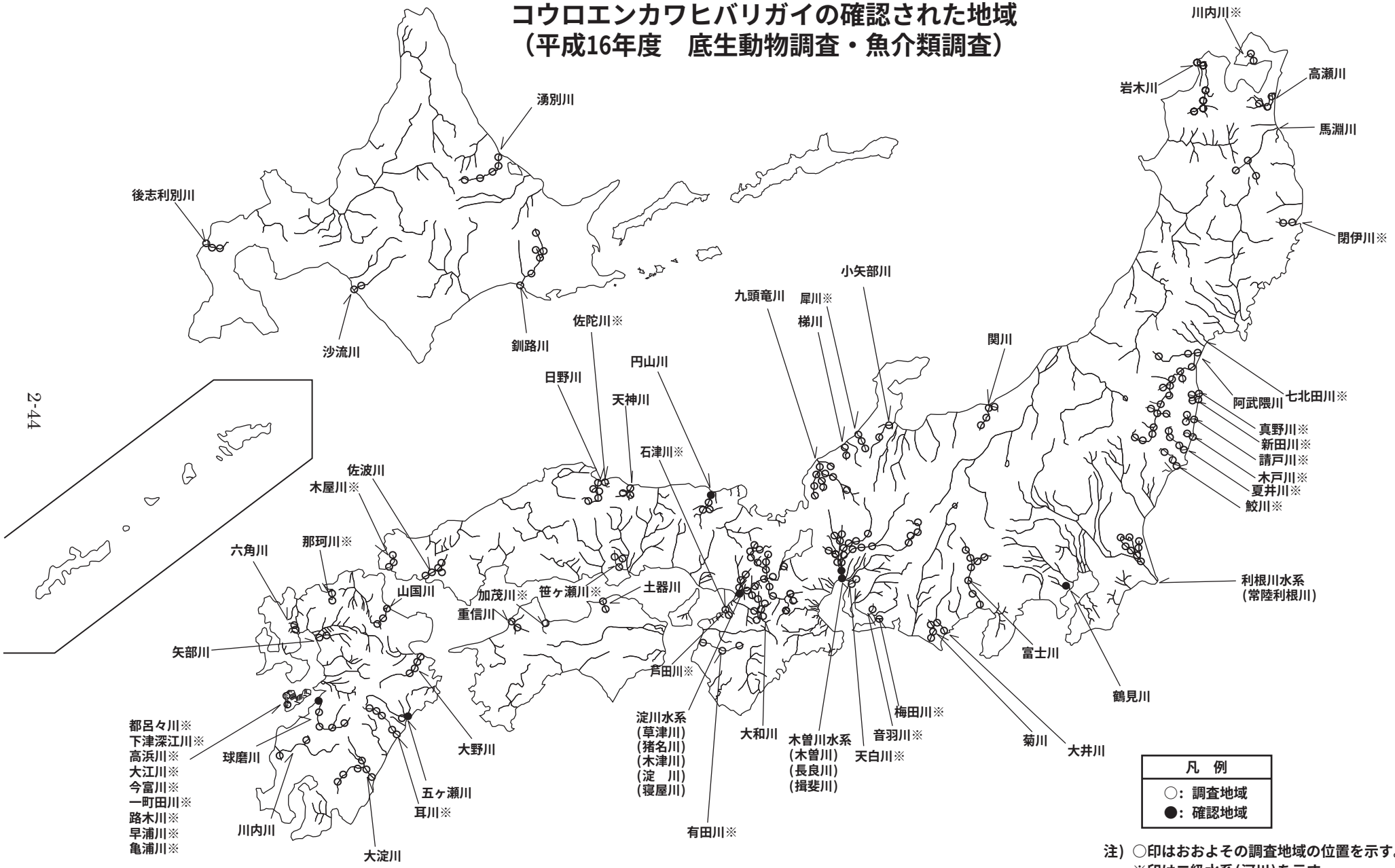
今回とりまとめを行った 70 河川では、カワヒバリガイは中部地方の木曽川水系木曽川、長良川、揖斐川、近畿地方の淀川水系淀川の 4 河川で確認されました。コウロエンカワヒバリガイは、関東地方、中部地方、近畿地方、九州地方の 9 河川で確認されました。前々回、前回も調査を行っている 54 河川での確認状況を比較すると、カワヒバリガイは 3 回とも同じ河川で確認されました。コウロエンカワヒバリガイは、北海道、東北地方、中国地方の河川では 3 回とも確認されていませんが、今回九州の 2 河川で新たに確認され、確認河川数は増加傾向にありました。

カワヒバリガイの確認された地域
（平成16年度　底生動物調査・魚介類調査）



注）○印はおおよその調査地域の位置を示す。
※印は二級水系(河川)を示す。

コウロエンカワヒバリガイの確認された地域
（平成16年度　底生動物調査・魚介類調査）



注）○印はおおよその調査地域の位置を示す。
※印は二級水系(河川)を示す。

【外来種の確認状況（アメリカザリガニ、ウチダザリガニ)】　　(底生動物・魚介類調査)

・　**アメリカザリガニを本州以南の 32 河川で確認**

国外産の甲殻類であるアメリカザリガニ、ウチダザリガニの確認状況を整理しました。

アメリカザリガニは、アメリカ合衆国南東部の原産で、食用として養殖するために持ちこまれたウシガエルの餌として国内に持ちこまれました。ウチダザリガニは、北アメリカ原産で、1920 年代に食用として日本各地に導入されました。現在は、北海道の各地や福島県などに生息します。

今回とりまとめを行った 70 河川では、アメリカザリガニは本州以南の 42 河川で確認されました。ウチダザリガニは、北海道の湧別川と釧路川で確認されました。前々回、前回も調査を行っている 54 河川での確認状況を比較すると、アメリカザリガニ、ウチダザリガニともに前回と今回はほぼ同様でした。

(資料掲載: 2-46～47、2-50 ページ)

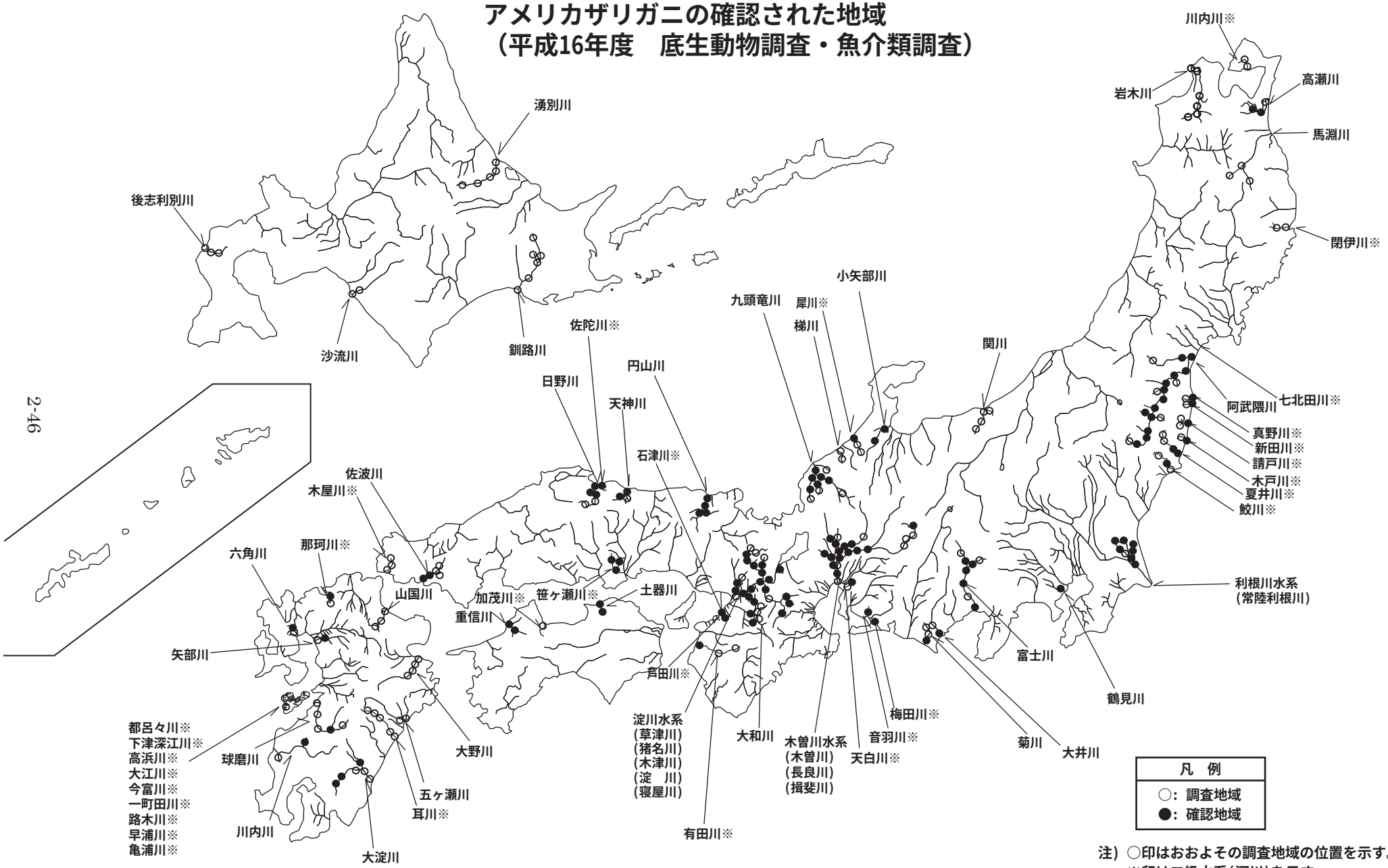
確認河川数の比較 (対象河川: 54 河川)

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
アメリカザリガニ	35 河川	41 河川	40 河川
ウチダザリガニ	1 河川	2 河川	2 河川

アメリカザリガニは、アメリカ合衆国南東部の原産で、食用として養殖するために持ちこまれたウシガエルの餌として国内に持ちこまれました。ウチダザリガニは、北アメリカ原産で 1920 年代に食用として日本各地に導入されました。生態系や在来種に大きな影響があるとして、外来種ハンドブック（日本生態学会編,2002)で侵略的外来種ワースト 100 に指定されています。また、アメリカザリガニは、環境省の外来生物法の要注意外来生物、ウチダザリガニは特定外来生物となっています。

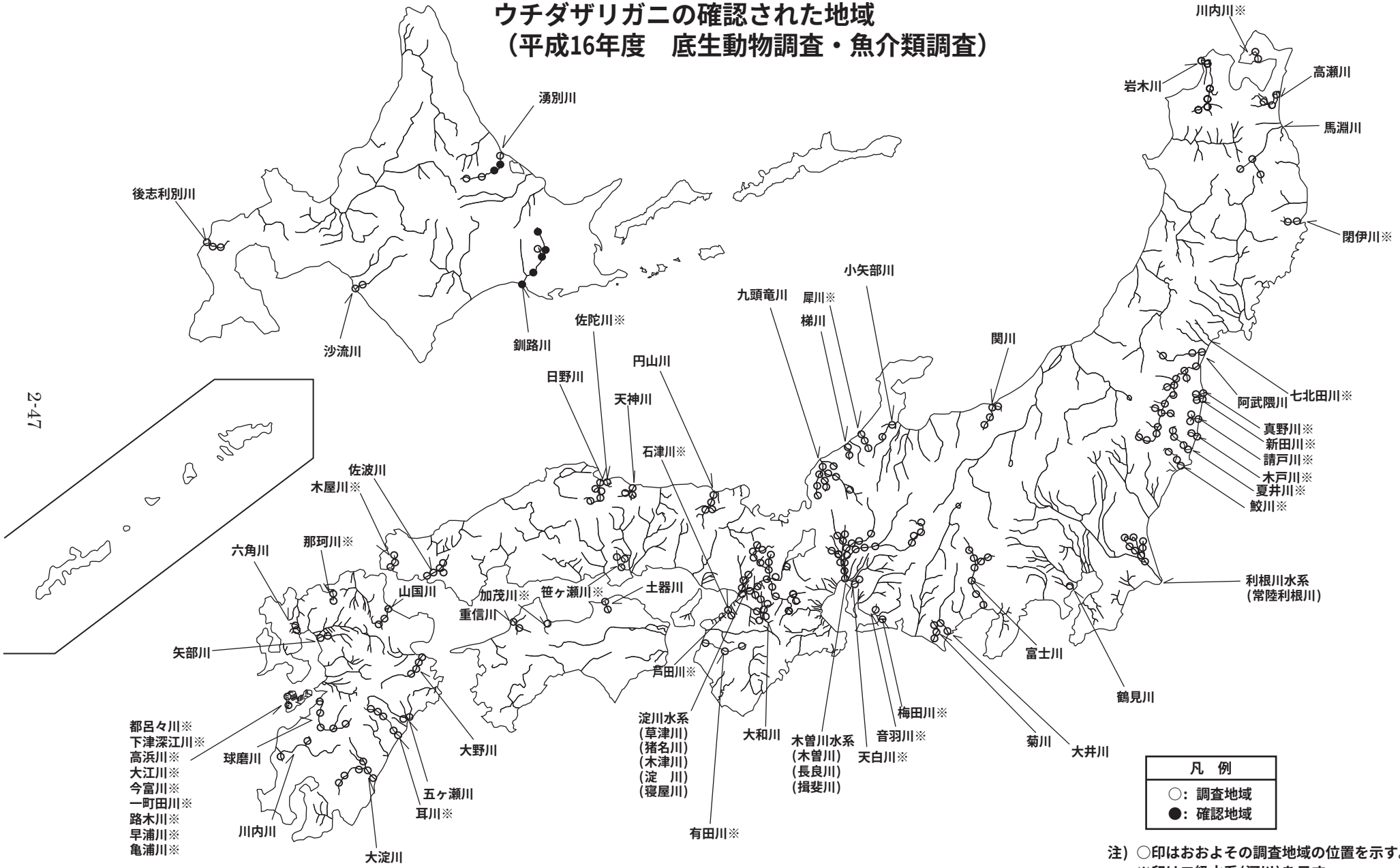
今回とりまとめを行った 70 河川では、アメリカザリガニは本州以南の 42 河川で確認されました。ウチダザリガニは、北海道の湧別川と釧路川で確認されました。前々回、前回も調査を行っている 54 河川での確認状況を比較すると、アメリカザリガニ、ウチダザリガニともに前回と今回はほぼ同様でした。

アメリカザリガニの確認された地域
（平成16年度　底生動物調査・魚介類調査）



注）○印はおおよその調査地域の位置を示す。
※印は二級水系(河川)を示す。

ウチダザリガニの確認された地域
（平成16年度　底生動物調査・魚介類調査）



注）○印はおおよその調査地域の位置を示す。
※印は二級水系(河川)を示す。